

2024 年冬鳥ウォッチの報告

バードリサーチ 山崎優佑

2024 年冬(以下、24 年冬)の報告では、アトリとマヒワについて分析した結果を報告します。まずアトリについては、北海道や東北で 1 万羽以上の群れが観察されました。これは越冬地の気温が高かったことや餌資源が豊富だったことが関係していた可能性があります。また秋の渡りの経路を調べるため、10~11 月に野鳥データベースに寄せられたデータも確認したところ、福岡県と山口県周辺、北陸、北海道の 3 つの経路があるかもしれないことがわかりました。次にマヒワについては、この 6 年間で情報件数が大きく変動していました。この変動には、その年の繁殖成績や朝鮮半島の秋の気温の高低が関係しているかもしれません。以下に、これらのことを説明します。

調査地及び記録状況

24 年冬は、北海道から九州までの 36 名によって合計 85 か所の調査地で各種の合計 111 件の情報が寄せられました(図 1)。情報件数を地域別で見ると、北海道や東北、関東、九州から多数の情報が寄せられました(図 2)。近年はバードリサーチの野鳥データベース「フィールドノート」に情報を入力される協力者も増えてきているため、冬鳥ウォッチの送信フォームに送信される協力者は減少傾向となっているかもしれません。なお、野鳥データベースに寄せられた情報も含めた場合、カシラダカ、マヒワ、アトリ、カワラヒワの 4 種の情報件数の合計は、1261 件で、23 年冬の 1453 件よりやや少ない程度でした。

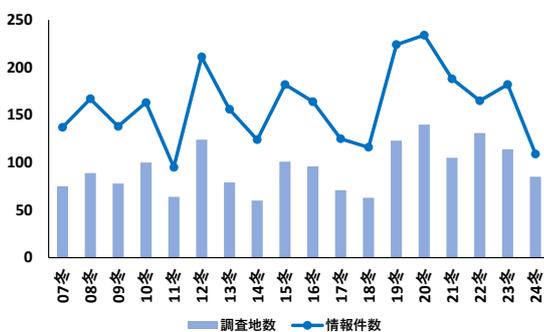


図 1. 冬鳥ウォッチの調査地数および情報件数の推移。

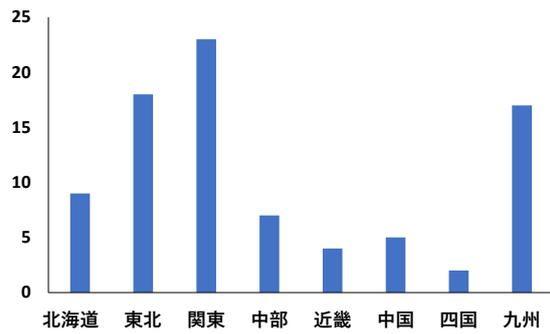


図 2. 地域ごとの調査地件数。

24 年冬は北日本でアトリの大きな群れが越冬していた

24 年冬は、北海道と東北でアトリの 1 万羽以上の群れが報告されました。分布状況は冬鳥ウォッチの web ページからご確認ください (<https://x.gd/BLkax>)。群れサイズについて具体的には、まず北海道では数十万羽がねぐら入りする姿が確認されました。北海道でこれほどの規模の群れがバードリサーチに寄せられたのは今回が初です。次に東北では約 1 万羽の群れが観察されました。

これらの地域でこれほど大きな規模の群れが越冬した理由は、気温が高かったことや餌が豊富にあったことが関係しているかもしれません。まず気温については、24 年冬は北ほど平年と比べて高く、特に道東は平年より 1.5 度高かったそうです。

[1]. 次に餌資源については、林野庁東北森林管理局によると、24年冬の東北のブナは並作か豊作だったそうです[2]. このように比較的暖かく、餌であるブナも豊富にあったことは、アトリにとって越冬しやすい環境だった可能性があります。



アトリが日本に飛来する経路は3つある？

10～11月に野鳥データベースに寄せられた情報から、日本で越冬するアトリは、福岡県と山口県周辺、北陸、北海道の3つの経路のうちのどれかから飛来した可能性があります。図3の通り、10～11月に観察された位置と個体数の情報を地図上にプロットしました。これを確認すると、福岡県と山口県周辺か、北陸の2つの地域で特に大きな群れが観察されていることがわかります(図3)。このことから、日本で越冬するアトリの多くがこの2地点のどちらかから飛来した可能性が示唆されます。他にも、20羽ほどですが、10月に知床でも観察されており、12月以降数万羽の群れが越冬したことを考えると、カムチャッカ半島などで繁殖した個体群の中には、北海道を経由して渡ってきた個体群がいた可能性もあります。

北海道や北陸から飛来した個体群は、東北まで移動していたかもしれません。北海道では、11月までの時点での情報件数は少ないですが、12月には8万羽の群れが観察されています。このことから北海道の個体群の一部がさらに南下していた可能性があります。その一方で北陸から飛来した個体群の一部が北上した可能性もあります。東北で

は南の地域ほど早い時期から観察されている傾向がありました。実際に図3を見ると、11月までの時点で観察されたのは福島県だけです。12月になってから宮城県や岩手県でも情報が寄せられるようになっていきました。今後は秋の渡りの経路についても調べていきたいと考えております。

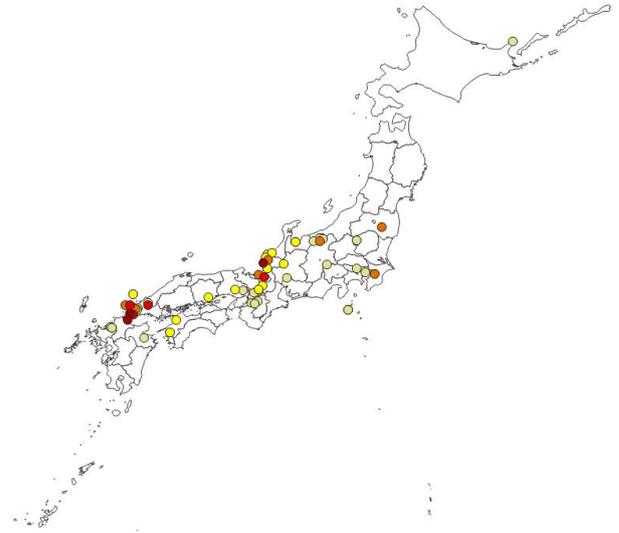


図3. 24年10月～11月のアトリの分布

マヒワの越冬個体数は繁殖地の餌や朝鮮半島の気候が影響する!?

マヒワの越冬個体数は年によって大きく変動しますと考えられます。図4の通り、年によって情報件数が大きく異なっています。情報件数が少なかったとしても、一部で大規模な群れを形成していたなら、個体数の変動は少ないと言えるかもしれません。ですが、そのような情報が寄せられることはめったにありません。

この変動には、繁殖成功率の高さが影響している可能性があります。日本ではなくヨーロッパでの事例ですが、スウェーデンでの繁殖成功率が高いと、秋にスウェーデンからデンマークやドイツへと渡る個体数が増える可能性が示唆されています[3]. これと同じことが日本などの極東地域でも起きているかもしれません。

ほかにも朝鮮半島の秋の気候が日本に渡来する個体数に影響しているかもしれません。気象庁の

ソウルや釜山の気温データを調べたところ (<https://x.gd/qPMB8>), ソウルや釜山の11月の月平均気温が高い年では、日本でのマヒワの情報件数が少なくなる傾向が確認されました(図4)。このことからマヒワにとって11月の朝鮮半島の気温が、日本へ渡来するかどうかの判断基準になっているかもしれません。その場合朝鮮半島での越冬個体数が多くなっていると予想されますが、これに関する情報は現在こちらにはありませんので、今後は海外の情報にも注目していきたいと考えております。

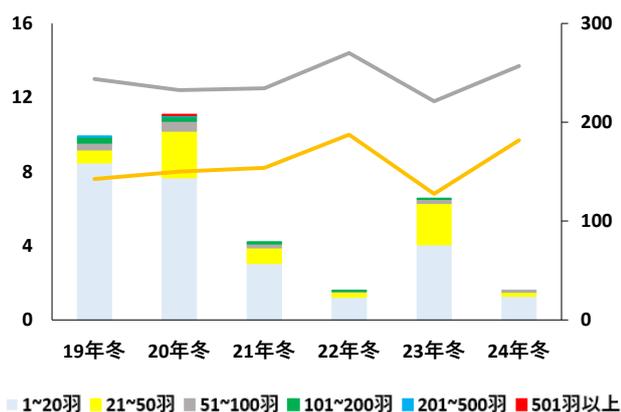


図4. 棒グラフは冬鳥ウォッチに寄せられた年ごとのマヒワの情報件数(目盛は右)。折れ線グラフはソウル(オレンジ)と釜山(灰色)の11月の平均気温(目盛は左)。

最後に

24年冬は他の種でも注目すべき傾向がありました。例えばイスカは、越冬個体数に関する情報が全く入ってきませんでした。このことから24年冬の越冬個体数は非常に少なかった可能性があります。他にもカシラダカの情報件数は20年冬をピークに減少傾向でしたが、24年冬は286件寄せられ、23年冬の276件からわずかに増えました。一方、カラヒワは情報件数が22年冬からやや減少傾向です。引き続きこれらの種の個体数の推移を分析していきたいと考えておりますので、調査にご協力頂きますようよろしくお願いいたします。

末尾ながら、冬鳥ウォッチで情報をお寄せ頂き

ました皆さまのご芳名を記してお礼に替えさせていただきます。また、今回も分析を進めるにあたって野鳥データベースに収集されたデータも利用させて頂きました。日頃より野鳥データベースに情報を提供して頂いている皆様にも深く感謝申し上げます。

江指万里, 徳長ゆり香, 井上賢三郎, 猿子正彦, 岡山えり, 加藤俊哉, 加藤美奈子, 宮石弘, 五十嵐勉, 高橋邦年, 黒岩哲夫, 佐久間文男, 山口健一, 市原農太郎, 鹿間信弘, 酒井浩二, 小池順子, 小林雅弘, 松前良彦, 上出貴士, 城石一徹, 須田由美, 菅原美奈子, 石川友紀子, 千島康幸, 前田容子, 多田英行, 滝澤三郎, 中島知佳, 辻啓子, 富永誠, 武廣一輝, 木原正裕, 暦本郁子, 姜雅瑠, 平野敏明の各氏。

引用

[1] ウェザーニュース. (2025年3月1日). 2月の気温は相次ぐ寒波で基準値下回る 冬の期間はほぼ平年並みも地域差大.(最終閲覧日: 2025年4月28日) .

<https://weathernews.jp/news/202503/010075/>

[2] 東北森林管理局. ブナ開花・結実調査. 林野庁(最終閲覧日: 2025年4月28日).

<https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/sidou/buna.html>

[3] Dale, S., Ekeboom, A., & Dahl, Å. (2025). Breeding population size, migration, and wintering of the Eurasian Siskin *Spinus spinus* in relation to seed crop sizes of food trees. *Ornis Svecica*, 35, 26–41.

<https://doi.org/10.34080/os.v35.26266>